

3. 10 クモ形類

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

カテゴリー 分類群	絶滅 (EX)	野生 絶滅 (EW)	絶滅危惧 I 類		絶滅危惧 II 類 (VU)	準絶滅 危惧 (NT)	絶滅のおそれ ある地域個体群 (LP)	情報 不足 (DD)	合 計	
			I A 類 (CR)	I B 類 (EN)						
初版 1996	0		0	—	—	0	4	1	0	5
改訂第2版 2005	0	0	0	0	0	1	4	1	0	6
改訂第3版 2017	0	0	6	4	2	11	7	1	8	33

※初版のカテゴリーのうち、絶滅種は現行のカテゴリー名の絶滅と野生絶滅を集約することで示し、このほか絶滅危惧種は絶滅危惧 I 類、危急種は絶滅危惧 II 類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー名に変換して示した。

(1) 本改訂でのおもな留意点

前回の改訂までは、クモ形類の個々の種について、分布や生態の詳細な研究報告が少なく、カテゴリー分けするに足りる種を選別することができず、多くの種の掲載を見送ったことから、掲載種は6種にとどまった。今回の検討でも、基本的にクモ形類全般に関する分布、生態についての情報不足は否めない。しかしながら、キムラグモ類に見られるように、特定の種群の研究について大きな進展があったり、環境アセスメント調査の拡大に伴い、多くの分布情報が得られてきていること、また近年の開発の速さや土地利用の多様化が、いくつかの種においては危機的な状況を生み出していることから、早急に掲載していく必要性が指摘された。このため、現況の資料に基づいて可能な限り選定する方向で検討を行った。

検討過程の中では、ツシマトリノフンダマシやワクトツキジグモ、近年再発見されたムツトゲイセキグモなどの、いわゆる珍種と呼ばれる種についても議論された。これらの種は、発見例が少なく、生息個体数も多くないことは予想されるが、本県における分布は風媒による可能性があること、繁殖や生態、生息実態等が明らかになっていないことから、今回の掲載は見送ることとなった。

結論としては、県内で繁殖を繰り返している（定着している）種のうち、琉球列島の地史と関連して分布するものを中心に、33種の掲載種を選定した。前回までの掲載種数と比較して、大幅に掲載種が増加したということになるが、クモ形類全体に比べるとまだまだ少ないと思われる。

(2) 本改訂で明らかになったこと

洞穴や林床などの限定的な環境に生息する種や、市街地の森林などに生息する種が都市の拡大に伴い個体数を減少させていることが明らかになってきた。その一方で、クモ形類の多くが環境と連動して生活していることから、森林や溪流といった環境の標徴種となる可能性が指摘されている。これまでの掲載種のカテゴリー分けは、主に分布や個体数の希少性が基準となってきたが、変化の速度があまりにも速い社会の中で、多くの貴重種の保護のためにも生息環境の変化を速めに把握する必要があるだろう。今後は、こうした観点からのカテゴリー分けについても検討し、新たなカテゴリーの設定も必要になるかもしれない。今回掲載した種の中にも、こうした特徴を示す可能性のある種を情報不足種として掲載した。

執筆者 千木良 芳範（宜野湾市立博物館・館長）

(3) 掲載種の解説

1) 絶滅危惧 I A 類 (CR)

和名 : オキナワホラアナヤチグモ
 分類 : クモ目 タナグモ科
 学名 : *Coelotes troglocaecus* Shimojana & Nishihira, 2000
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 該当なし

形態 : 体長は雌 5.0~8.0 mm。雄は未発見。甲背は単黄色で頭部はやや褐色を帯び、全体に斑紋を欠く。眼は完全に消失し痕跡もなく、眼域には数本の長毛を有する。上顎には前牙堤に 3 歯、後牙堤に 2 歯を有する。腹部は灰白色の長毛で覆われ無紋。歩脚は単黄色で輪紋を欠く。外雌器突起は他のヤチグモ類に比べて小さく痕跡的である。

近似種との区別 : 沖縄のクモ類で、完全に無眼の種は本種のみである。また、沖縄島には同属のオキナワヤチグモ *C. okinawensisha* が洞口周辺に生息するが、本種は洞内の比較的深い場所に見られる。

分布の概要 : 沖縄島の固有種。これまでに本種が発見されている洞窟は、野原洞 (本部町)、ニシブーマバル洞 (名護市)、為朝ノホラアナ洞 (今帰仁村)、日秀洞 (金武町)、八重島岩戸洞 (沖縄市)、マーヤガマ (宜野湾市)、沖縄刑務所前の穴 (南城市) だけである。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 広義のヤチグモ属 *Coelotes* は、形態的な類似性から 13 の種群に分けられており、本種はアカキナヤチグモ *C. akakinaensis* (奄美大島・宝島)、イヘヤチグモ *C. iheyaensis* (伊平屋島固有)、シマヤチグモ *C. insulanus* (奄美大島固有)、ナセヤチグモ *C. nasensis* (奄美大島固有)、ヤクシマヤチグモ *C. osamui* (屋久島固有) からなるナセヤチグモ種群に含まれる。

生態的特徴 : 眼が完全に退化した真洞窟性のクモは、県内では本種のみである。琉球石灰岩などに形成される自然洞 (鍾乳洞) だけに生息し、洞口からの光が届かない洞内深部で発見されている。これまで本種の生息が確認されている洞窟は、いずれも標高 60 m 以上の場所に位置する。洞床の転石の下に生息し、石と洞床の隙間に住居を伴わない単純なシート状の網を張る。洞床でカマドウマの幼虫を捕食している例が観察されており、網を使わずに獲物を捕獲している可能性が示唆されている。

生息地の条件 : 洞内に外光が入らない十分な深さがあり、鍾乳石が形成されるような湿潤な鍾乳洞のみに生息する。

現在の生息状況 : 本種の生息が確認されているのは、本部半島以南の 7 つの石灰岩洞 (鍾乳洞) で、発見されている個体数も 7 個体 (成体 4、亜成体 3) と極めて少ない。

学術的意義・評価 : 沖縄県に生息する唯一の真洞窟性のクモであり、琉球列島の地史と関連したヤチグモ類の洞窟環境への適応進化や種分化を研究する上で重要な種である。

生存に対する脅威 : 都市開発や農地整備などによる洞窟の消失。周辺緑地の減少による洞内の乾燥化やゴミの投棄、下水の流入、観光洞化による洞内環境の悪化。

特記事項 : 雄は未発見。

原記載 : Shimojana, M. & Nishihira, M., 2000. A new cave-dwelling eyeless spider of the genus *Coelotes* (Araneae: Amaurobiidae) from Okinawa Island, the Ryukyu Islands, Japan, with notes on possible parthenogenesis. *Acta Arachnologica*, 49: 29-40.

参考文献 : 奥村賢一・下謝名松栄・西川喜朗・小野展嗣, 2009. ヤチグモ科. “日本産クモ類”, 小野展嗣 (編著), 東海大学出版会, 神奈川, 174-205.
 下謝名松栄, 1979. 沖縄島および周辺離島の洞窟動物. “沖縄県洞窟実態調査報告 II”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 97-153.

執筆者名 : 佐々木健志

和名 : ヤマトウシオグモ
 分類 : クモ目 ウシオグモ科
 学名 : *Desis japonica* Yaginuma, 1956
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 情報不足 (DD)

形態 : 体長は、雌雄ともに 6~8 mm。頭胸部は円筒形で、上顎は長く前方に突出する。頭胸部と上顎は濃褐色、腹部は灰褐色で長毛を密生する。上顎には外顎があり、雌では前牙堤に 7 歯、後牙堤に 2 歯を有し、雄では前牙堤に 5 歯、後牙堤に 1 歯と数個の小歯を有する。オスの触肢は背甲長の 1.5 倍と長い。雌の外雌器は縦長で開口部は後方にあり、側葉と後端には胃外溝から突出する硬化した垂帯を有する。

近似種との区別 : 本種と同所的に生息するアワセイソタナグモ *Paratheuma awasensis* は、体長が 4 mm ほどの造網性種で、上顎が前方に突出していないなどの点で容易に区別できる。

分布の概要 : 日本の固有種。関東以南に分布し、伊豆諸島 (式根島)、和歌山県、熊本県、長崎県、トカラ列島 (宝島)、沖縄島、久米島などで生息が確認されているが、分布は極めて局所的である。県内の詳細な分布状況は不明。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : *Desis* 属は、日本のほかオーストラリア、ニューギニア、サモア、アフリカ、ガラ

<クモ形類>

- 生態的特徴：パゴス、インド、マレーシアなどに14種が知られている。形態的に近縁とされる *D. marina* は、ニュージーランド、オーストラリア、ニューカレドニアに分布する。
Desis 属の種は潮間帯のみに生息する特異なクモで、本種も満潮時には完全に水没するサンゴ礁の潮間帯に生息し、汀線から数百メートルも離れたリーフエッジ付近まで見られる。水没時にはサンゴの隙間や転石裏の窪み、死貝の殻の中などに潜み、入り口を糸のシートで覆い海水の進入を防ぐ。徘徊性のクモで、干潮時に岩礁上を歩き回り、海浜性の等脚類や昆虫類などの小さな節足動物を捕食する。
- 生息地の条件：県内では、サンゴ礁が発達し波が穏やかなリーフ内や転石が点在する砂質干潟などの潮間帯に生息する。
- 現在の生息状況：これまでに、沖縄島で6カ所、久米島で1カ所の海岸で生息が確認されているが、いずれも分布は局所的で個体数も少ない。
- 学術的意義・評価：潮干帯という特異な生息環境に完全に適応したクモで、ミズグモなどとともにクモ類の水環境への適応進化を研究する上で重要な種である。
- 生存に対する脅威：沖縄県内の生息地は、そのほとんどがサンゴ礁の発達した波が穏やかなリーフ内であるため、埋め立てによる生息地の消失や護岸工事などによる生息環境の悪化が進んでいる。また、海岸部への赤土や汚泥の流入によって、営巣場所となるサンゴ礁や転石の孔隙が埋まると生息できなくなる。
- 特記事項：沖縄県内の分布については、さらに詳細な調査を必要とする。
- 原記載：Yaginuma T., 1956. A new species of marine spider *Desis* from Japan. *Publ. Seto. Mar. Biol., Lab.*, V (3): 363-366.
- 参考文献：小野展嗣, 2009. タナグモ科. “日本産クモ類”, 小野展嗣(編著), 東海大学出版会, 神奈川, 206-212.
下謝名松栄, 1967. 琉球列島のクモ相について. *Biol. Mag. Okinawa*, 4: 16-25.
谷川明男・佐々木健志, 1999. 沖縄県産クモ類目録. *KISHIDAIA*, 76: 61-101.
World Spider Catalog, 2017. World Spider Catalog. Natural History Museum Bern, online at <http://wsc.nmbe.ch>, version 18.0, (accessed on 25 January 2017).
八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑. 保育社, 大阪, 398pp.
吉倉眞, 1987. クモの生物学. 学会出版センター, 東京, 613pp.

執筆者名：佐々木健志

和名：アワセイソタナグモ
分類：クモ目 ウシオグモ科
学名：*Paratheuma awasensis* Shimojana, 2013
カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態：体長は雌 4 mm、雄 3.5 mm ほど。背甲前部は赤褐色を帯び、後部は淡褐色で全体に光沢がある。腹部背面は灰色で全体に短毛に覆われる。雄の触肢器官の指示器の先端部は、指状に長く突出している。上顎は下方を向き、雌雄ともに前牙堤には3歯を有し、後牙堤には雄では5小歯を、雌では5ないし7小歯を有する。雌の外雌器は横長で、開口部は左右に分かれる。
- 近似種との区別：県内に分布する同属のイソタナグモ *P. shirahamaensis* とシマイソタナグモ *P. insulana* は、潮上帯にある岩礁の隙間、石や打ち上げられた海藻の間などに造網するが、本種は潮間帯のみに生息する。雄の触肢の指示器先端にあるキチン化したへら状の突起の形状が他の2種と異なるほか、雄の後牙堤の小歯の数が他の2種では6~8歯であるが、本種は5歯である。雌の外雌器の形状も他の2種とは異なる。また、本種と同所的に生息するヤマトウシオグモ (*Desis japonica*) は、徘徊性種で体長が6~8 mm と大きく、上顎が前方に突出しているなどの点で区別できる。
- 分布の概要：沖縄島の固有種。現在、生息が確認されているのは、模式産地の沖縄市泡瀬海岸のみである。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較：イソタナグモ属 *Paratheuma* は、日本を含む太平洋諸島や西インド諸島に11種が知られており、沖縄県内にはアワセイソタナグモ、イソタナグモ、シマイソタナグモの3種が分布する。そのうち、シマイソタナグモは、尖閣諸島 C 北小島)、硫黄島、沖縄島、小笠原諸島、広島県で確認されているが、本来の分布地はフロリダ半島と西インド諸島であることから、船舶等による外来種の可能性が示唆されている。
- 生態的特徴：本種は満潮時には完全に水没する潮間帯のみに生息し、転石(主にサンゴの死骸)の裏側にある窪みに、管状の住居を伴った小さな棚網を張る。同所的に生息するヤマトウシオグモは海岸から数百メートル離れたリーフエッジまで生息するが、本種は満潮時でも水深の浅い汀線近くの潮間帯に生息する。海浜性の等脚類や昆虫類などの小さな節足動物を捕食している。
- 生息地の条件：沖合にサンゴ礁が発達した波が穏やかな海岸で、潮間帯に造網場所となるサンゴの転石が点在するリーフ内や砂質干潟。
- 現在の生息状況：沖縄島の沖縄市泡瀬海岸に局所的に生息し、個体数は極めて少ない。
- 学術的意義・評価：本種は潮干帯という特異な生息環境に適応したクモで、*Paratheuma* 属の水環境への適応進化や種分化を研究する上で重要な種である。
- 生存に対する脅威：現在、唯一の生息地である沖縄市泡瀬干潟は、大規模な埋め立て工事が進行しており、生息場所の消失や工事に伴う汚泥の堆積による生息環境の悪化が懸念される。
- 特記事項：本種の分布については、さらに詳細な調査を必要とする。
- 原記載：Shimojana, M., 2012. A new species of the marine spider genus *Paratheuma* (Araneae: Agelenidae) from Okinawajima Island, Japan. *Acta Arachnologica*, 61(2): 93-96.
- 参考文献：小野展嗣, 2006. 相模灘沿岸地域の海浜性クモ類. 国立科学博物館専報, (42): 257-276.

- 小野展嗣, 2009. タナグモ科. “日本産クモ類”, 小野展嗣 (編著), 東海大学出版会, 神奈川, 206-212.
- 佐々木健志・東清二, 2002. 硫黄鳥島のクモ類. “沖縄県史 資料編 13 硫黄鳥島”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 181-192.
- World Spider Catalog, 2017. World Spider Catalog. Natural History Museum Bern, online at <http://wsc.nmbe.ch>, version 18.0, (accessed on 25 January 2017).
- Zamani, A., Marusik, Y. M. & Berry, J. W. (2016). A new species of *Paratheuma* (Araneae: Dictynidae) from Southwestern Asia and transfer of the genus. *Zoology in the Middle East*, 62(2): 177-183.

執筆者名 : 佐々木健志

和名 : **ダイトウヤイトムシ**
 分類 : ヤイトムシ目 ヤイトムシ科
 学名 : *Apozomus daitoensis* (Shimojana, 1981)
 カテゴリー : 絶滅危惧種 I A (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長は雌雄ともに 4.0~6.0 mm。頭胸部は長く、1 枚の大きな前背板と、2 枚の細く小さな中背板、2 枚の台形をした後背板とに分かれる。眼は無く、背向前縁に 3 本、中央に 2 対 4 本の刺毛を有する。触肢は歩脚状で先端が尖り、上顎は小さく缺状である。第 1 脚は細長く、歩行時には前方に伸ばして触角のように使う。腹部は 12 節で、腹端には雌では 3 節からなる棒状の鞭状部が、雄ではラケット状の鞭状部がある。

近似種との区別 : 日本に分布するヤイトムシ科 Hubbardiidae の種には、ダイトウヤイトムシのほか、ザウターヤイトムシ *Apozomus sauteri*、ウデナガヤイトムシ *Bamazomus siamensis*、サワダムシ *Orientzomus sawadai* の 3 種がある。いずれの種も外部形態は類似するが、雄の腹部末端にある鞭状部の形状、背甲後背板の形状、第一歩脚の長さなどの違いなどによって区別できる。

分布の概要 : 大東諸島 (南大東島・北大東島) の固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ヤイトムシ類は、世界の熱帯や亜熱帯地域の湿潤な林床や洞内に生息し、36 属 207 種が知られている。日本には 4 種が分布し、そのうち、沖縄県内にはダイトウヤイトムシのほか、ザウターヤイトムシ (奄美大島・喜界島・沖永良部島・伊江島・宮城島・沖縄島・久米島・宮古島・石垣島・西表島・与那国島・台湾・ベトナム) とウデナガヤイトムシ (沖縄島・宮古島・タイ・オアフ島・ホンコン) の 3 種が、小笠原諸島にはサワダムシが分布する。また、台湾には雌の生殖器の形状などから本種に最も近縁とされるヤマサキヤイトムシ *S. yamasakii* が分布する。

生態的特徴 : 洞窟の洞口付近に多く見られ、洞床の転石や洞外から流入した木片などの下に生息する。肉食性で、洞床を徘徊してトビムシなどの小さな節足動物を捕食する。産卵期は 7~8 月で、雌は土中に土を固めた小室を造って産卵し、卵塊を腹部に付けて保護する。産卵数は 10 個内外である。詳しい生態については不明。

生息地の条件 : 本種は乾燥に弱く、湿潤な洞窟にのみ生息する。

現在の生息状況 : 南大東島では、星野の穴、今村軍三の穴、金比羅洞で、また北大東島では、北泉洞、宮城洞、仲宗根洞、玉城第一、第二洞、仲里洞、幕下第一洞でそれぞれ生息が確認されている。いずれの洞窟も、個体数は極めて少ない。

学術的意義・評価 : 大東諸島の地史と関連したヤイトムシ属の種分化や海洋島への分散過程などを研究する上で重要である。

生存に対する脅威 : 南・北大東島ともに、農地整備などによる洞窟の破壊に加え、ゴミの投棄や赤土の流入などによる洞内環境の悪化が進んでいる。また、大東諸島には外来種のオオヒキガエル (*Rhinella marina*)、ミヤコヒキガエル (*Bufo gargarizans miyakonis*)、ヌマガエル (*Fejervarya kawamurai*) が生息しており、これらのカエル類による捕食も懸念される。

特記事項 : 本種は、Cokendolpher (1988) による *Trithyreus* から *Schizomus* への属の変更に伴い、和名もダイトウサワダムシからダイトウヤイトムシに変更された。さらに、Harvey (1992) によって、*Schizomus* から *Apozomus* へ属が変更された。

原記載 : Shimojana, M., 1981. A new species of the genus *Trithyreus* (Uropygi, Schizomidae) from Daito-Islands, Okinawa Prefecture, Japan. *Acta Arachnol.*, 30: 33-40.

参考文献 : Cokendolpher, J. C., 1988. Review of the Schizomidae (Arachnida: Schizomida) of Japan and Taiwan. *Bulletin of the Natural Science Museum*, 14: 159-171.

Harvey, M. S., 1992. The Schizomida (Chelicerata) of Australia. *Invertebrate Taxonomy*, 6:77-129.

Harvey M. S., 2003. Catalogue of the smaller arachnid orders of the world: Amblypygi, Uropygi, Schizomida, Palpigradi, Ricinulei and Solifugae. CSIRO Publishing, 385pp.

下謝名松栄, 2015. ヤイトムシ目. “第二版 日本産土壌動物”, 青木淳一 (編著), 東海大学出版会, 神奈川, 725-728.

下謝名松栄, 1978. 南・北大東島および沖縄島南部地域の洞穴動物相. “沖縄県洞穴実態調査報告 I, 沖縄県天然記念物調査シリーズ第 19 集”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 75-111.

執筆者名 : 佐々木健志

2) 絶滅危惧 I B 類 (EN)

和名 : ミヤコジマトタテグモ
分類 : クモ目 トタテグモ科
学名 : *Latouchia japonica* Strand, 1910
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 触肢が歩脚と同程度に長い。体色は暗色で腹部背面にはヤハズ状の斑紋がある。
近似種との区別 : メスでは同属他種との区別はできない。オスで識別できる可能性があるが、現時点では本種のオスが未発見であり、その可否は不明である。現時点での同定は、DNA バーコーディングに拠らざるを得ない。
分布の概要 : 宮古島だけに生息している。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 宮古島には本属のクモは本種だけが生息している。
生態的特徴 : 穴居性で、メスはほとんど移動せず、繁殖期にはオス成体のみが徘徊するものと思われる。子グモの分散も歩行するだけであろう。成長が極めて遅く、繁殖力が弱いものと思われる(同属他種からの推定)。
生息地の条件 : 土の地面に巣穴を掘っている。
個体数の動向 : 現時点で確認されている生息地点はわずかで、生息個体数も少ない。耕作地の増加とともに生息適地の多くが失われたものと思われる。現在の生息地が失われてしまうと、個体群の再生は不可能であろう。
現在の生息状況 : 本来は林内、林縁に生息していたものと考えられるが、現時点では緑地公園などに遺存している状態である。
学術的意義・評価 : 宮古島固有種であり、古くに記載されてはいるが、その後の発見例がほとんどなく、オスは未発見で、詳細な生態的な特徴も不明のままである。分子系統学的な解析ではヤエヤマトタテグモと近縁であると推定されている。
生存に対する脅威 : 生息地の開発、耕作地化。

執筆者名 : 谷川明男

和名 : ダイトウマルガタワカバグモ
分類 : クモ目 カニグモ科
学名 : *Loxobates daitoensis* Ono, 1988
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長は、雌は5~8 mm、雄は3~4 mm。本種が属するマルガタワカバグモ属 (*Loxobates*) は背甲が幅より長さが大きく高い。また、腹部は丸みを帯び、長さは幅の2倍以下。体色は液浸標本では淡黄褐色から黄色、腹部背面に線状斑(白色または赤色)を持つ。2015年及び2016年の調査では、生時、オスは全身が光沢のある緑色の体色であり、メスは淡黄褐色から淡緑色の体色で眼域が赤く、腹部背面に外側が淡黄色に縁取られた赤色斑があった。また、幼体は腹部が丸く、体色はやや光沢のある緑色であった。
近似種との区別 : 同所的に生息するホシズナワカバグモ *Oxytate hoshizuna* は、本種と同じく緑色を基調とした体色であるが、雌雄とも細身且つ扁平な体型で、腹部の長さは幅の2倍以上である。本種の体型は扁平ではなく、腹部は幅広で丸みを帯びる。
分布の概要 : 南・北大東島。
Song (1994) は中国海南島から本種の雄1個体を報告したが、雄触肢に僅かな差異があると併記している。Ono (2009) は大東諸島のみを分布域としており、これに準じた。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : マルガタワカバグモ属は、インドネシアスラウェシ島の *L. ephippiatus* をタイプ種とする小属で、インドからミャンマー、中国、インドネシアなどから10種知られ、国内では本種のみ。
生態的特徴 : ホシズナワカバグモは、驚くとクログなどの樹木の葉上に張り付くよう定位するのに対し、本種ではそのような行動は見られず、幼体は驚くと広葉樹の葉柄基部や細枝の又に移動して定位する行動が見られた。2016年1月調査では少数の成体及び幼体を、同年5月調査では多数の幼体を、同年および前年の11月調査では少数の成体と多数の若齢幼体を確認した。下謝名の1970年代の調査では、7、8月に成体及び少数の幼体が確認されている。
生息地の条件 : ダイトウビロウが混在する広葉樹林の樹上に見られる。生息地ではホシズナワカバグモは広く見られるが、本種は湿った水辺まわりに局在的に見られる傾向があった。
現在の生息状況 : 南大東島では、2016年調査で島内の神社社叢林1箇所から確認したが、他所では確認できなかった。模式産地の北大東島では、2016年の2回の調査では生息を確認できなかった。
学術的意義・評価 : 国内唯一のマルガタワカバグモ属のクモ。同属種は熱帯アジアから中国にかけて分布し、本種は南・北大東島に隔離分布する。
生存に対する脅威 : 南大東島の生息地は、神社社叢林であり、且つ鳥獣特別保護地区内であることから開発のおそれは無いが、小面積であることから台風などによる森林荒廃も生存の脅威となりうる。社叢林の維持管理にも配慮が求められる。
特記事項 : 南・北大東島の固有種。
原記載 : Ono, H., 1988. A revisional study of the spider family Thomisidae (Arachnida, Araneae) of Japan. National

- Science Museum, Tokyo, ii + 252pp.
 参 考 文 献 : Song, D. X., 1994. On three species of crab spiders from Hainan, China. Acta Arachnologica Sinica, 3: 119-123.
 Ono, H., 2009. The Spiders of Japan with keys to the families and genera and illustrations of the species. Tokai University Press, Kanagawa, xvi+739pp.

執 筆 者 名 : 西山桂一・須黒達巳

3) 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

和 名 : **クンジャンキムラグモ**
 分 類 : クモ目 ハラフシグモ科
 学 名 : *Heptahtela helios* Tanikawa & Miyashita, 2014
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ※指定名 キムラグモ (広義)

形 態 : 触肢が歩脚と同程度に長い。糸疣は腹部腹面中央部に位置し、腹部背面には体節の痕跡を残している。
 近似種との区別 : ヤンバルキムラグモと隠ぺい種の関係にあり、外部形態では識別できず、同定にはミトコンドリア DNA COI 遺伝子の塩基配列を見る必要がある。
 分布の概要 : 沖縄島北端部と伊江島との限られた範囲のみに生息している。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ヤンバルキムラグモとは、沖縄島北端の分布境界帯でわずかな混在地が見られる。
 生態的特徴 : 穴居性で、メスはほとんど移動せず、繁殖期にはオス成体のみが徘徊する。子グモの分散も歩行するだけなので移動分散力が弱く地域ごとに集団の分化が見られる。成長が極めて遅いので、繁殖力が弱い。
 生息地の条件 : 林内あるいは林縁などの、乾燥しきって硬くならない、また、雨があまり当たらない土の地面が必要である。
 個体数の動向 : 現時点での産地ではほぼ安定している。
 現在の生息状況 : 林内あるいは林縁、林道沿いに生息している。
 学術的意義・評価 : クモ類の原始的な体の構造を残す「生きている化石」である。
 生存に対する脅威 : 森林の伐採や開発、道路の新設や拡幅。

執 筆 者 名 : 谷川明男

和 名 : **ヤンバルキムラグモ**
 分 類 : クモ目 ハラフシグモ科
 学 名 : *Heptathela yanbaruensis* Haupt, 1983
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ※指定名 キムラグモ (広義)

形 態 : 触肢が歩脚と同程度に長い。糸疣は腹部腹面中央部に位置し、腹部背面には体節の痕跡を残している。
 近似種との区別 : クンジャンキムラグモと隠ぺい種の関係にあり、外部形態では識別できず、同定にはミトコンドリア DNA COI 遺伝子の塩基配列を見る必要がある。
 分布の概要 : 沖縄島北部、南部、伊平屋島、久米島、渡嘉敷島に隔離分布している。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : クンジャンキムラグモとは、沖縄島北端の分布境界帯でわずかな混在地が見られる。
 生態的特徴 : 穴居性で、メスはほとんど移動せず、繁殖期にはオス成体のみが徘徊する。子グモの分散も歩行するだけなので移動分散力が弱く地域ごとに集団の分化が見られる。成長が極めて遅いので、繁殖力が弱い。
 生息地の条件 : 林内あるいは林縁などの、乾燥しきって硬くならない、また、雨があまり当たらない土の地面が必要である。
 個体数の動向 : 現時点での産地ではほぼ安定している。
 現在の生息状況 : 林内あるいは林縁、林道沿いに生息している。
 学術的意義・評価 : クモ類の原始的な体の構造を残す「生きている化石」である。
 生存に対する脅威 : 森林の伐採や開発、道路の新設や拡幅。

執 筆 者 名 : 谷川明男

和 名 : **オキナワキムラグモ属 (イヘヤキムラグモ、イシガキキムラグモ、オキナワキムラグモ、クメジマキムラグモ)**
 分 類 : クモ目 ハラフシグモ科

〈クモ形類〉

学 名 : *Ryuthela iheyana* Ono, 2002 イヘヤキムラグモ
Ryuthela ishigakiensis Haupt, 1983 イシガキキムラグモ
Ryuthela nishihirai (Haupt, 1979) オキナワキムラグモ
Ryuthela sasakii Ono, 1997 クメジマキムラグモ
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ※指定名 オキナワキムラグモ (広義)

形態 : 触肢が歩脚と同程度に長い。糸疣は腹部腹面中央部に位置し、腹部背面には体節の痕跡を残している。
近似種との区別 : 同属の4種は、オス触肢の形態で区別することができるが、メスでは正確な同定はできない。しかし、分布域が互いに異所的なので、産地によって種名を明らかにできる。
分布の概要 : 沖縄島にオキナワキムラグモ、伊平屋島にイヘヤキムラグモ、久米島と慶良間諸島にクメジマキムラグモ、石垣島と西表島にイシガキキムラグモが異所的に分布している。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : オキナワキムラグモ属4種の分布域は互いに異所的であるが、沖縄島、伊平屋島、伊江島、久米島、渡嘉敷島では、オキナワキムラグモもしくはクメジマキムラグモとキムラグモ属のヤンバルキムラグモないしクンジャンキムラグモとが混在している。
生態的特徴 : 穴居性で、メスはほとんど移動せず、繁殖期にはオス成体のみが徘徊する。子グモの分散も歩行するだけなので移動分散力が弱く地域ごとに集団の分化が見られる。成長が極めて遅いので、繁殖力が弱い。
生息地の条件 : 林内あるいは林縁などの、乾燥しきって硬くならない、また、雨があまり当たらない土の地面が必要である。
個体数の動向 : 現時点での産地ではほぼ安定しているが、沖縄島南部の都市域では、これまでに多くの生息地が都市化によって失われ、それに伴って生息個体数もかなり減少したものと考えられる。
現在の生息状況 : 林内あるいは林縁、林道沿いに生息している。
学術的意義・評価 : クモ類の原始的な体の構造を残す「生きている化石」である。
生存に対する脅威 : 都市化、森林の伐採や開発、道路の新設や拡幅。

執筆者名 : 谷川明男

和名 : ヤエヤマトタテグモ
分類 : クモ目 トタテグモ科
学名 : *Latouchia hyla* Haupt & Shimojana, 2001
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 触肢が歩脚と同程度に長い。体色は暗色で腹部背面にはヤハズ状の斑紋がある。
近似種との区別 : 同属他種とは、オス触肢のわずかな形態差で識別できるが、メスでは区別することはできない。
分布の概要 : 西表島と与那国島からは生息記録があるが、現時点では石垣島からの記録がない。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 地面に巣穴を掘ることが多いが、木の幹や倒木に巣を形成することもある。
生態的特徴 : 穴居性で、メスはほとんど移動せず、繁殖期にはオス成体のみが徘徊する。子グモの分散も歩行するだけであるが、巣穴を形成した樹木や倒木ごと海流に流されることによる分散が生じている可能性がある。成長が極めて遅いので、繁殖力が弱い。
生息地の条件 : 土の地面に巣穴を掘っていることが多いが、樹木の幹や倒木に巣を形成することもある。
個体数の動向 : 現時点での生息地では安定しているものと思われるが、生息密度は高くない。
現在の生息状況 : 林内、林縁などに生息している。
学術的意義・評価 : 地理的な隔離による種分化、ないし海流分散による分布拡大などの研究材料として貴重である。
生存に対する脅威 : 森林伐採。

執筆者名 : 谷川明男

和名 : シマトタテグモ
分類 : クモ目 トタテグモ科
学名 : *Latouchia parameleomene* Haupt & Shimojana, 2001
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 触肢が歩脚と同程度に長い。体色は暗色で腹部背面にはヤハズ状の斑紋がある。
近似種との区別 : オキナワトタテグモと本種はオス触肢のわずかな形態差で識別できるが、メスでは区別することはできない。
分布の概要 : 沖縄島内ではオキナワトタテグモと本種が混在しており、その他の沖縄諸島にはオキナワトタテグモ (広義) が生息している。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 地面に巣穴を掘ることが多いが、木の幹や倒木に巣を形成することもある。
生態的特徴 : 穴居性で、メスはほとんど移動せず、繁殖期にはオス成体のみが徘徊する。子グモの分散も歩行するだけであるが、巣穴を形成した樹木や倒木ごと海流に流されることによる分散が生じている可能性がある。成長が極めて遅いので、繁殖力が弱い。
生息地の条件 : 土の地面に巣穴を掘っていることが多いが、樹木の幹や倒木に巣を形成することもある。

個体数の動向 : 現時点での生息地では安定しているものと思われるが、沖縄島南部では都市化によって多くの生息地が失われ、それによって個体数も大きく減少したものと思われる。
 現在の生息状況 : 林内、林縁、緑地公園などに生息している。
 学術的意義・評価 : 地理的な隔離による種分化、ないし海流分散による分布拡大などの研究材料として貴重である。
 生存に対する脅威 : 都市化。

執筆者名 : 谷川明男

和名 : オキナワトタテグモ
 分類 : クモ目 トタテグモ科
 学名 : *Latouchia swinhoei* Pocock, 1901
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 該当なし

※類似種であるシマトタテグモにあわせて解説を示した (シマトタテグモの項を参照)。

執筆者名 : 谷川明男

和名 : クメジマイボブトグモ
 分類 : クモ目 イボブトグモ科
 学名 : *Sinopesa kumensis* Shimojana & Haupt, 2000
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 該当なし

形態 : 体長は、雌は9~10 mm、雄は7~8 mm。トタテグモ下目イボブトグモ科タイリクイボブトグモ属に属し、形態的な雌雄差は少ない。背甲は淡褐色で、眼は背甲の前縁に接近する。雄第1脚脛節腹面に3本の巨大な刺と1対の短い刺を有する。腹部は濃い灰色で斑紋は無い。

近似種との区別 : 奄美諸島 (奄美大島、徳之島) や八重山諸島に生息する同じトタテグモ下目のジョウゴグモ科 (Hexathelidae) に近いが、歩脚の附節に毛束があり、後疣がはるかに短いことなどで区別される。

分布の概要 : 久米島のみ分布。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : イボブトグモ科 (Nemesiidae) は世界の熱帯から暖温帯にかけて300種以上知られ、本種が属するタイリクイボブトグモ属 (*Sinopesa*) は、タイ北部から中国、日本から3種知られるが、国内では本種のみ。

生態的特徴 : 洞窟内では、とくに洞奥のコウモリグアナノが堆積した周辺の転石下で見つかり、糸を張った巣は見られず、転石下の窪みに静止していた。歩行速度は速く、いったん走り出すとかなりの速度で一直線に逃げ去る。2016年6月には、洞窟内で幼体を確認している。山林では、長野・長谷川 (2016) により石や倒木下のトンネル状の窪みに粗く糸を張って巣とすることが確認されている。長野・長谷川 (2016) は、この糸が獲物を察知するための機能を持つ可能性を示唆している。筆者による山林内の調査では、ミミズが土を穿孔した後を利用しているようで、岩の下には無数の溝状の窪みや地中へと続くトンネル状の穴があり、発見してもすぐこの穴の奥に隠れてしまう。

生息地の条件 : 鍾乳洞内や常緑広葉樹林内の石下、倒木下、崖地の地中で確認される。

現在の生息状況 : 副模式産地の1洞窟での2015年調査では少数を確認した。また、同年には周辺の小洞窟内から1個体を確認した。山林内では2015年に7個体を確認されており (長野・長谷川, 2016)、筆者による2016年12月調査では2個体を確認した。現状で生息が確認されるのは4箇所、個体数は少ない。模式産地を含む島内山林や洞窟の生息状況の詳細は不明。

学術的意義・評価 : 国内で唯一のイボブトグモ科のクモ。久米島にのみ産し、琉球列島の地史や沖縄島と久米島の生物地理的関連を考える上から貴重である。

生存に対する脅威 : 洞窟環境の荒廃。副模式産地の1洞窟は、入洞が禁止されているものの、近年、洞内の転石が動かされたり一部崩されるなどの攪乱があり、生息環境の悪化や密猟が懸念される。

特記事項 : 久米島固有種。

原記載 : Shimojana, M. & Haupt, J., 2000. A new nemesiid spider (Arachnida, Araneae) from the Ryukyu Archipelago, Japan. *Zoosystema*, 22: 709-717.

参考文献 : Shimojana, M. & Ono, H., 2009. Nemesiidae. "The Spiders of Japan with keys to the families and genera and illustrations of the species", Ono, H. (ed.), Tokai University Press, Kanagawa, 96.
 長野宏紀・長谷川貴浩, 2016. クメジマイボブトグモの再発見及び巣の形態について. *KHSHIDAIA*, 108: 16-18.

執筆者名 : 戸部海童・西山桂一

和名 : クメコシビロザトウムシ
 分類 : ザトウムシ目 カマアカザトウムシ科
 学名 : *Parabeloniscus shimojanai* Suzuki, 1971
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU)

形態 : 体長4 mm内外のアカザトウムシ亜目の種。だるま型の背甲と細長い歩脚、それに第4脚の基節が左右に膨らむのが特徴。体と歩脚は黄橙色。眼や体色の退行はみられない。

〈クモ形類〉

- 近似種との区別 : 本種はオヒキコシビロザトウムシよりひとまわり大きく、雄では第4脚基節の左右への膨らみと突起の発達が目立つ。雌雄ともに腹部第3自由背板の尾状突起はない。
- 分布の概要 : 沖縄島西方に位置する久米島と渡嘉敷島に分布。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : クメコシビロザトウムシは久米島と渡嘉敷島、オヒキコシビロザトウムシは沖縄島、宮城島、伊計島（本種と同種または近縁種とみられる個体群が、徳之島、奄美大島、屋久島にも見られる）と、両種の分布域は分かれている。
- 生態的特徴 : 洞内の食物連鎖の中では中位の捕食者に位置する。洞奥より洞口～洞奥50m付近に生息。好洞穴種。
- 生息地の条件 : 洞穴動物は一般に洞内の環境変化に敏感なので洞内環境（低温、多湿、暗所等）の維持が必要である。
- 個体数の動向 : 一部の生息地の洞穴の消失や洞穴の観光化により減少傾向と考えられる。
- 現在の生息状況 : 洞穴内の石、流入木等の下やコウモリグアノ周辺等に生息している。個体数は少ない。
- 学術的意義・評価 : 沖縄諸島のコシビロザトウムシ属内の種分化、および環境適応への研究するうえでも貴重な種群である。
- 生存に対する脅威 : 農地およびリゾート地造成等による鍾乳洞の攪乱と破壊。
- 特記事項 : 久米島の洞穴動物の標徴種の一つである。好洞穴種。本種の生息洞であった久米島のガニマンロウアブ（黄金柱のガマ）は鍾乳石の採掘と農地造成で消滅（1975年）。タイプ産地のヤジャーガマ洞穴は1976年の時点ですでに観光のため入洞する人が増えており、その後もさらに増えている。
- 原記載 : Suzuki, S., 1971. Opiliones of the Ryukyus. Journal of Science of the Hiroshima University Ser. B, Div. 1 (Zoology), Hiroshima University, 23: 187-213.
- 参考文献 : Suzuki, S., 1973. Opiliones from the South-West Islands, Japan. Journal of Science of the Hiroshima University Ser. B, Div. 1 (Zoology), Hiroshima University, 24: 205-279.
鶴崎展巨, 2014. クメコシビロザトウムシ. “レッドデータブック2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 7. その他の無脊椎動物（クモ形類・甲殻類等）”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）、ぎょうせい、東京、29.
- 執筆者名 : 下謝名松榮*・鶴崎展巨（追補） *前回改訂版（2005）における下謝名による記載内容を一部見直した。

4) 準絶滅危惧 (NT)

- 和名 : オオクロケブカジョウゴグモ
分類 : クモ目 ジョウゴグモ科
学名 : *Macrothele gigas* Shimojana & Haupt, 1998
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

体長は雌20～26mm、雄25～29mm。頭胸部背面は黒色で、腹部と歩脚は黒色の長毛で覆われ、腹部に斑紋はない。上顎は赤褐色で、前方に突出する。眼は8眼で、頭胸部前縁の楕円形の眼丘上に位置する。腹部末端の糸状は2対しかなく、後糸は非常に長い。八重山諸島（西表島・石垣島）の固有種。県内には同属のヤエヤマジョウゴグモ *M. yaginumai* が同所的に分布するが、体長は15mm前後と一回り小さく、腹部は茶褐色で矢はずの斑紋があり、触肢転節側面に花弁状の付属物が無く、雄の第2脚の蹠節腹面に大きな窪みがあることなどで区別できる。また、台湾には近縁なホルストジョウゴグモ *M. holsti* が分布する。

餌となる地上徘徊性の節足動物が豊富な湿潤な森林の林床に生息し、倒木や石の下などに管状の住居を造り、入り口の周辺に0.5～1mほどもある大きな棚網を張る。繁殖期は6～8月頃で、雌は200個前後の卵が入った卵嚢を造り、孵化まで巣内で保護する。大型のクモで成体の生息密度は低く、また成体になるまでに期間を要すると推察されることから、開発や採集による影響を受け易い。特に、石垣島では森林開発や下草刈りなどによって生息環境が悪化しており、個体数が激減した地域もある。また、タランチュラに似た大型のクモで、ペットとして採集個体が販売されており乱獲も懸念される。

- 原記載 : Shimojana M. and J. Haupt, 1998. Taxonomy and Natural history of the Funnel-web spider genus *Macrothele* (Araneae: Hexathelidae: Macrothelinae) in the Ryukyu islands (Japan) and Taiwan. Species diversity, 3: 1-15.
- 参考文献 : 池原貞雄・下謝名松榮, 2009. 沖縄の陸の動物. 風土記社, 那覇, 143pp.
下謝名松榮, 2009. ジョウゴグモ科. “日本産クモ類”, 小野展嗣（編著）, 東海大学出版会, 神奈川, 92-95.
- 執筆者名 : 佐々木健志

- 和名 : キノボリトタテグモ
分類 : クモ目 トタテグモ科
学名 : *Conothele fragaria* (Dönitz, 1887)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 触肢が歩脚と同程度に長い。体色はほぼ黒色で光沢があり斑紋はない。
 近似種との区別 : 同じ科のトタテグモ類とは腹部に斑紋がないことや、巣穴が浅いことなどで識別することができる。
 分布の概要 : 石垣島からはこれまで生息記録がないが、県内全域に生息していると思われる。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同じ科の他のトタテグモ類は地面に巣穴を掘ることが多く、本種は木の幹や岩の表面に巣を形成することが多いが、地面に巣穴を形成し、同科他種と混在していることもある。
 生態的特徴 : 穴居性で、メスはほとんど移動せず、繁殖期にはオス成体のみが徘徊する。子グモの分散も歩行するだけであるが、巣穴を形成した樹木ごと海流に流されることによる分散が生じている可能性がある。成長が極めて遅いので、繁殖力が弱い。
 生息地の条件 : 太い樹木の表面や岩の表面に寝袋状の巣を形成して潜んでいることが多いが、土の地面に巣穴を掘っていることもある。
 個体数の動向 : 目撃例は多くないが、それは巣穴が目につきにくいことが主な原因と思われる。
 現在の生息状況 : 林内、林縁、緑地公園などに生息している。
 学術的意義・評価 : 本属のクモ類で日本に生息するのは本種1種のみである。
 生存に対する脅威 : 都市化。

執筆者名 : 谷川明男

和名 : リュウキュウカヤシマグモ
 分類 : クモ目 カヤシマグモ科
 学名 : *Tricalamus ryukyuensis* Ono, 2013
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長は雌 4.3~5.6 mm、雄 2.5~3.3 mm。背甲は楕円形で、8眼は集団を形成し背甲の前縁と中央の間に位置する。雌の触肢の先端には多数の歯を備えた1爪がある。体色は、雌は淡褐色から暗褐色、雄は淡褐色から暗赤褐色で、雌雄とも腿節がより暗色。腹部背面から側面にかけて淡黄褐色の毛を密生し、雌では縞状に雄では円状に配される。
 近似種との区別 : 日本に産する同属のトビイロカヤシマグモ *Tricalamus fuscatus* とは雄の触肢器官の栓子の形状、雌の生殖器の受精囊の形状が異なる。
 分布の概要 : 沖縄島でのみ確認されている。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 小笠原諸島とパラオから近縁のトビイロカヤシマグモが確認されている。ほかに大分県からハラナガカヤシマグモ、琉球列島と台湾からカヤシマグモの記録があるが、日本における近年の確実な記録はない。カヤシマグモ科は世界の温暖な地域に100種以上を擁する。
 生態的特徴 : 林内及び林縁の琉球石灰岩の岩崖、またはそれに連続するコンクリート等人工物の表面に集団で営巣しコロニーを形成する。巣は、岩のくぼみにボロ網を吹き付けたような不定形な外観で、岩の間隙に続くトンネルを形成し、クモはその入り口付近や奥に潜んでいる。巣網には昆虫類、多足類、甲殻類等、様々な小動物の死骸が附着している。夜間、巣のトンネルの入り口付近でアリ類、ヨコバイ類、ハマトビムシ類を捕え、内部に引きずり込む個体が確認されている。5月に配偶行動と卵塊、8~9月に成体と同居する複数の幼体(体長約1mm強)、コロニー内で分散移動または巣作りを開始する幼体(体長約1mm強~2mm弱)が確認されている。
 生息地の条件 : 好適な生息地は、日光や風雨の影響が比較的穏やかで、年間を通して湿度の良く保たれた岩崖を有する樹林であると考えられ、石灰岩地の自然林等が該当する。ただし、台湾では同様な生態を持つ近縁種が市街地にも普通に生息していることから、潜在的にはある程度人為環境にも適応できる可能性はある。
 現在の生息状況 : 都市部の居住地区に島状に残存するわずかな樹林地が、唯一継続的に生息が確認されている場所である。2016年夏の調査では、90個体以上の生息が確認された。
 学術的意義・評価 : ミクロネシアから琉球列島にかけての本属の種分化や進出時期を研究する上からも貴重な種である。
 生存に対する脅威 : 生息地は、島内でも開発が著しい中部地区の都市部に位置しており、宅地開発等による岩崖と樹林の破壊、攪乱が現実には危惧される。また、同所の個体群は、ある年にコロニー内のほとんどの個体がヤマシログモ類に置き換わったことがあった。2016年夏の調査では、個体数はほぼ回復し安定しているものの、ごく小さな生息地しか確認されていないことから、生態的競合種との動態も注視する必要がある。
 特記事項 : 生息地が模式産地しか知られていない。継続的な生態調査とともに、新たな生息地の発見が望まれる。
 原記載 : Ono, H., 2013. Spiders of the Genus *Tricalamus* (Araneae, Filistatidae) from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science, 39(1) 15-20.
 参考文献 : 小野展嗣, 2009. カヤシマグモ科. “日本産クモ類”, 小野展嗣(編著), 東海大学出版会, 神奈川, 125-126.
 執筆者名 : 名嘉猛留

和名 : オキナワマシラグモ
 分類 : クモ目 マシラグモ科
 学名 : *Falcileptoneta okinawaensis* Komatsu, 1972
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

<クモ形類>

- 形態 : 体長 1.9 mm 前後。腹部の斑紋はチョコレート色で、ウデナガマシラグモ *Masirana longipalpis* のような眼の退化傾向や退色は見られない。
- 近似種との区別 : 他のマシラグモ類とは把持器 (Apophysis) の形が特異であるので識別は容易である。
- 分布の概要 : 沖縄島読谷村のシムクガマの個体が模式種。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種は今のところ、沖縄島の中部地域に分布は限られ、極めて分布域も狭い。同じ *Falcileptoneta* 属の未記載種が与那国島、黒島から記録されている。ウデナガマシラグモは琉球列島に広く分布する。
- 生態的特徴 : 洞口から 50 m 内の洞壁のくぼみや礫間にマシラグモ属特有の網を張る。好洞窟性の種類。
- 生息地の条件 : 周辺環境が安定した洞窟
- 個体数の動向 : 沖縄島の洞窟から記録があるが、詳細な調査は行われていない。
- 学術的意義・評価 : 個体数が少なく、かつ分布域も狭く、沖縄諸島におけるマシラグモ類の種分化研究上で重要な種である。
- 生存に対する脅威 : 開発や農地改良事業による洞窟自体の消失。洞窟周辺の樹木の消失による洞内環境の悪化。
- 特記事項 : 沖縄島の固有種。県内からはこのほかにもマシラグモ科の未記載種がみつかっており、詳細な研究が必要である。
- 原記載 : Komatsu, T., 1972. Two new cave spiders from Okinawa island (genera *Falcileptoneta* and *Masirana*, Leptonetidae). *Acta arachnologica*, 24: 82-85.
- 参考文献 : 小野展嗣, (2009). 日本産クモ類. 東海大学出版会, 神奈川, xvi+739 pp.
下謝名松栄, 1978. 南・北大東島および沖縄島南部地域の洞穴動物相. “沖縄県洞窟実態調査報告 I”, 沖縄県教育委員会, 沖縄, 75-111.
下謝名松栄, 1979. 沖縄島および周辺離島の洞窟動物. “沖縄県洞窟実態調査報告 II”, 沖縄県教育委員会, 沖縄, 97-153.
下謝名松栄, 1973. 八重山群島の石灰洞窟の動物調査報告, 沖縄生物教育研究会誌, (6): 1-26.
- 執筆者名 : 下謝名松栄*, 田村常雄(追補) *前回改訂版(2005)における下謝名による記載内容を一部見直した。

和名 : **ウデナガマシラグモ**
分類 : クモ目 マシラグモ科
学名 : *Masirana longipalpis* Komatsu, 1972
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態 : 体長 2.7 mm 前後。背甲は黄褐色で腹部は淡褐色。雄の触肢は非常に長い。地域により眼の退化や退色傾向が見られる。
- 近似種との区別 : オスの触肢が非常に長いことで他の種と識別できる。
- 分布の概要 : 沖縄島、久米島、伊江島、渡名喜島、古宇利島、伊計島、宮城島、浜比嘉島、渡嘉敷島、石垣島の洞窟から記録がある。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 未記載種が県内から見つかっている。オキナワマシラグモは沖縄島に固有。
- 生態的特徴 : 洞内の洞壁、石筍などの隙間にシート状網をはる。鍾乳洞や人工洞に生息する。
- 生息地の条件 : 周辺環境が安定した洞窟
- 個体数の動向 : 各地の洞窟に生息するが、詳細な調査は行われていない。
- 学術的意義・評価 : 琉球列島の洞窟を代表する種である。眼の退化や退色傾向が地域により異なり、クモの洞窟への適応過程を明かにする上で重要な種である。
- 生存に対する脅威 : 開発や農地改良事業による洞窟自体の消失。洞窟周辺の樹木の消失による洞内環境の悪化。
- 特記事項 : 琉球列島の固有種。県内からはマシラグモ科の未記載種が複数みつかっており、詳細な研究が必要である。
- 原記載 : Komatsu, T., 1972. Two new cave spiders from Okinawa island (genera *Falcileptoneta* and *Masirana*, Leptonetidae). *Acta arachnologica*, 24: 82-85.
- 参考文献 : 小野展嗣, (2009). 日本産クモ類. 東海大学出版会, 神奈川, xvi+739 pp.
下謝名松栄, 1978. 南・北大東島および沖縄島南部地域の洞穴動物相. “沖縄県洞窟実態調査報告 I”, 沖縄県教育委員会, 沖縄, 75-111.
下謝名松栄, 1979. 沖縄島および周辺離島の洞窟動物. “沖縄県洞窟実態調査報告 II”, 沖縄県教育委員会, 沖縄, 97-153.
下謝名松栄, 1980. 先島(宮古諸島・八重山諸島)の洞窟動物. “沖縄県洞窟実態調査報告 III”, 沖縄県教育委員会, 沖縄, 103-142.
下謝名松栄, 1973. 八重山群島の石灰洞窟の動物調査報告, 沖縄生物教育研究会誌, (6): 1-26.
- 執筆者名 : 田村常雄

和名 : **オキナワホラヒメグモ**
分類 : クモ目 ホラヒメグモ科
学名 : *Nesticella okinawaensis* (Yaginuma, 1979)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長は雌 2.2 mm、雄 1.8 mm。
 近似種との区別 : 短肢系の種。オスは触肢の形状でコホラヒメグモ *Nesticella brevipes*、チビホラヒメグモ *Nesticella mogera* と識別が可能。メスは識別が困難である。
 分布の概要 : 県内では、沖縄島、久米島のいくつかの鍾乳洞から記録がある。県外では、徳之島、沖永良部島の鍾乳洞から記録がある。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : コホラヒメグモは与那国島、チビホラヒメグモは沖縄諸島、南大東島、宮古諸島、八重山諸島に生息する。
 生態的特徴 : 洞内の洞壁、石筍などの隙間に複雑な網をはる。好洞窟性のクモ。
 生息地の条件 : 周辺環境が安定した洞窟
 個体数の動向 : 沖縄諸島の洞窟から記録があるが、詳細な調査は行われていない。
 生存に対する脅威 : 開発や農地改良事業による洞窟自体の消失、周辺の樹木の消失による洞内環境の悪化。
 特記事項 : 琉球列島の固有種。今後、未記載種が見つかる可能性がある。
 原記載 : Yaginuma, T., 1979. A study of the Japanese species of nesticid spiders. Fac. Let. Rev., Otemon Gakuin Univ., 13: 255-287.
 参考文献 : 小野展嗣, (2009). 日本産クモ類. 東海大学出版会, 神奈川, xvi+739 pp.
 下謝名松栄, 1978. 南・北大東島および沖縄島南部地域の洞穴動物相. “沖縄県洞窟実態調査報告 I”, 沖縄県教育委員会, 沖縄, 75-111.
 下謝名松栄, 1979. 沖縄島および周辺離島の洞窟動物. “沖縄県洞窟実態調査報告 II”, 沖縄県教育委員会, 沖縄, 97-153.
 下謝名松栄, 1980. 先島(宮古諸島・八重山諸島)の洞窟動物. “沖縄県洞窟実態調査報告 III”, 沖縄県教育委員会, 沖縄, 103-142.
 執筆者名 : 田村常雄

和名 : オヒキコシビロザトウムシ
 分類 : ザトウムシ目 カマアカザトウムシ科
 学名 : *Parabelomiscus caudatus* Suzuki, 1973
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長 3~4 mm 内外。第 4 脚基節が左右に膨らむ。雄の腹部第 3 自由背板に尾状突起がある。体は淡黄色~白色。眼の退化もみられ無眼の個体もある。
 近似種との区別 : 近似種のクメコシビロザトウムシとは雄の腹部第三自由背板上に後方にのびる尾状突起があることで容易に識別できる。
 分布の概要 : 沖縄諸島の沖縄島、宮城島、伊計島。徳之島、奄美大島、屋久島でも同種または近似種と考えられる個体群が見つかっている。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : オヒキコシビロザトウムシは沖縄島以北、クメコシビロザトウムシは久米島、渡嘉敷島と分布域が明らかに異なる。
 生態的特徴 : 洞内の食物連鎖では中位の捕食者。生活史は不明。沖縄県内ではこれまで洞外からは見つからない。
 生息地の条件 : 本種は、洞内でもとくに高湿度、低温の洞奥の石や流入木の下、コウモリグアノの周辺に生息。
 個体数の動向 : 不明。
 現在の生息状況 : 不明。
 学術的意義・評価 : 無眼の個体も発見されており、洞穴環境と形態適応の研究材料としても興味深い種群である。
 生存に対する脅威 : 農地造成、土地改良およびリゾート造成等による鍾乳洞の攪乱と破壊(消滅)。
 特記事項 : 南西諸島の洞穴動物の標徴種の一つである。少なくとも沖縄県内では真洞穴種で、他種に比べて個体数も少なく、分布域も狭い。
 原記載 : Suzuki, S., 1973. Opiliones from the South-West Islands, Japan. Journal of Science of the Hiroshima University Ser. B Div. I (Zoology), Hiroshima University, 24: 205-279.
 参考文献 : Suzuki, S., 1973. Opiliones from the South-West Islands, Japan. Journal of Science of the Hiroshima University Ser. B Div. I (Zoology), Hiroshima University, 24: 205-279.
 執筆者名 : 下謝名松栄*・鶴崎展巨(追補) *前回改訂版(2005)における下謝名による記載内容を一部見直した。

5) 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

和名 : アマミサソリモドキ
 分類 : サソリモドキ目 サソリモドキ科
 学名 : *Typopeltis stimpsonii* (Wood, 1862)
 カテゴリー : 絶滅のおそれのある地域個体群(久米島、沖縄島、伊是名島)(LP) 環境省カテゴリー : 該当なし
 形態 : 体長は 40~50 mm。体色はくり茶~黒色で体は前体部と後体部からなる。雄の触肢の桿状突起はそ

<クモ形類>

- りかえる。雌の生殖板上には円～だ円形の凹刻がある。
- 近似種との区別 : 近似種のタイワンサソリモドキとは、雄では触肢の桿状突起の形、雌は生殖板の刻状紋の違いで区別できる。
- 分布の概要 : 沖縄県下では、本種は沖縄島（八重岳）、久米島（だるま山）、伊是名島（大野山）で分布が確認されている。島内での分布域は極めて局所的である。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : アマミサソリモドキは沖縄島、久米島、伊是名島、県外では、奄美諸島～天草牛深間に自然分布し、人為的な持ち込みと考えられる個体が本州、四国、八丈島に分布する。タイワンサソリモドキは宮古諸島（多良間島のみ）、八重山諸島、台湾に分布する。
- 生態的特徴 : 山地の石や倒木下に産室をつくり、卵塊は腹面に付着させ、ふ化した仔虫は腹背面にのせて産室で過ごす。刺激すると肛門腺から強い酢酸臭のガスを放出する。
- 生息地の条件 : 生息地の環境保全。
- 個体数の動向 : 不明。
- 現在の生息状況 : 主として山地の石や倒木下に生息。
- 学術的意義・評価 : 本種は久米島を南限とし、北限は東京と広範囲で分布している。しかし、沖縄県の3島（沖縄島、久米島、伊是名島）に生息する個体群は遺伝的固有性が高く、また、タイワンサソリモドキとの分布の境界に接していることから、遺伝的多様性や種分化の過程を解明するために重要な個体群である。
- 生存に対する脅威 : 生息地の環境変化、および、乱獲。
- 参考文献 : Karasawa, S. and S. Nagata, J. Aoki, K. Yahata, M. Honda, 2015. Phylogeographic study of whip scorpions (Chelicerata: Arachnida: Thelyphonida) in Japan and Taiwan. *Zoological Science*, 32(4): 352-363.
- 執筆者名 : 唐沢重考・下謝名松榮* *前回改訂版（2005）における下謝名による記載内容を一部引用した。

6) 情報不足 (DD)

- 和名 : ヤンバルユウレイグモ
- 分類 : クモ目 ユウレイグモ科
- 学名 : *Belisana yanbaruensis* (Irie, 2002)
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態 : 体長雌 2.1～2.5、雄 2.1～2.8 mm。眼は6眼で、体色は淡黄褐色、歩脚は淡褐色をしている。頭胸部及び腹部は卵形をしており、腹部背面に3から4対の淡灰色の斑紋を持つ個体もある。
- 近似種との区別 : ヒメユウレイグモやシモングモと似るが、腹部背面の斑紋や雄触肢、雌の外雌器で区別される。
- 分布の概要 : 沖縄島北部地域のみで見つかる。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島の中南部では、現在のところ本種は見られない。一方、ヒメユウレイグモは石垣島や西表島に分布しており、分布域が重なることはない。
- 生態的特徴 : 夜間に溪流添いの広葉樹などの葉裏に留まっているのを見る。また昼間に溪流周辺でのスニーピングに入ることもあるが、生態に関する詳細な調査はなく不明なところが多い。
- 生息地の条件 : 自然度の高い森林と好適条件の溪流環境が必要と思われる。
- 個体数の動向 : 詳細な調査はなく、不明である。
- 現在の生息状況 : 沖縄島北部地域のみで見つかる。
- 学術的意義・評価 : 森林溪流環境の指標となる種と思われる。
- 生存に対する脅威 : 農地及びリゾート開発等による森林環境の攪乱と破壊。
- 参考文献 : Irie, T., 2002. Two new species of the genera *Pholcus* and *Spermophora* (Araneae: Pholcidae) from the Nansei Islands, Japan. *Acta. Arach.*, 51(2): 141-144.
- 執筆者名 : 千木良芳範

- 和名 : コケオニグモ
- 分類 : クモ目 コガネグモ科
- 学名 : *Araneus seminiger* (L. Koch, 1878)
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態 : 体長雌 16.0～23.0 mm、雄 11.0～14.0 mm。背甲は褐色であるが、腹部は全体的に緑色を呈している。腹部上面中央に明瞭な褐色の葉状斑があり、腹部両肩は円錐状に低く隆起する。歩脚腿節には数本の太く短い刺がある。山地森林に生息し、溪流沿いの樹間や枝間に直径 60～70 cm の垂直円網を張る。夜間は網の中央に占座していることが多いが、昼間は網を張っていた近くの樹幹や葉裏にじっとしている。成体は5月から9月にかけて目撃され、11月から12月には亜成体を見る。
- 近似種との区別 : 沖縄県で、体の大きさや形態が類似するのはオニグモだけであるが、体色と斑紋で本種と区別できる。
- 分布の概要 : 北海道から沖縄諸島まで広く分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： オニグモは山地から低地まで広く分布するが、本種はこれまでのところ山地域でのみ見つかる。

- 生態的特徴： 詳細な調査はなく、不明である。
 生息地の条件： 自然度の高い森林と好適条件の溪流環境が必要と思われる。
 個体数の動向： 沖縄島における詳細な調査はなく不明であるが、これまでの目撃頻度からすると多くはない。
 現在の生息状況： 沖縄島では北部地域の山地森林内でのみ見つかる。
 学術的意義・評価： 生息環境がきわめて限定的で、森林環境の指標となる種と思われる。
 生存に対する脅威： 農地及びリゾート開発等による森林環境の攪乱と破壊。
 参考文献： Koch, L., 1878. Japanesische Arachniden und Myriapoden. Verh. k. k. zool. bot. Gesell. Wien, 27, 735-798, pls.15-16.
 Ono, H., 2002. New and remarkable spiders of the families Liphistiidae, Argyronetidae, Pisauridae, Theridiidae and Araneidae (Arachnida) from Japan. Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo, 28: 51-61.
 Tanikawa, A., 2001. Twelve new species and one newly recorded species of the genus *Araneus* (Araneae: Araneidae) from Japan. Acta Arachnol., 50(1): 63-86.

執筆者名： 千木良芳範

和名： オキナワナガイボグモ
 分類： クモ目 ナガイボグモ科
 学名： *Hersilia okinawaensis* Tanikawa, 1999
 カテゴリ： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ： 該当なし

形態： 体長雌 5.0～7.0 mm、雄 4.0～5.5 mm。背甲及び腹部上面は緑褐色に白色や明褐色、暗褐色の複雑な斑紋がある。出糸突起（糸疣）の後対が腹部の後方に著しく飛び出している。
 近似種との区別： ヤエヤマナガイボグモと酷似するが、外見で区別することは難しい。オスの触肢、メスの貯精のうの形で区別できる。

分布の概要： 沖縄島北部地域のみで見つかる。
 近縁な種及び群との分布状況の比較： 本種は奄美大島と沖縄島に、ヤエヤマナガイボグモは西表島と与那国島に分布し、両者の分布域は重ならない。

- 生態的特徴： 溪流沿いの樹木の幹の表面でくらし、成体は周年見ることができ。樹幹で待ち伏せ型の捕虫を行い、樹皮にアリや小さなガ類がくると、長い出糸突起から粘性の強い糸を投げかけて捕獲する。5月から9月に樹幹に3個から5個の卵のうを固めて産み付ける。卵は1ヶ月程で孵化し、仔グモが出のうする。詳細な生態については不明である。
 生息地の条件： 自然度の高い森林と好適条件の溪流環境が必要と思われる。
 個体数の動向： 沖縄島北部の生息地では、とりたてて減少傾向は認められないが、名護市や恩納村における動向は、詳細な調査がないので不明である。
 現在の生息状況： 沖縄島では名護市以北の溪流沿いで見つかるが、名護市における確認地は1河川の2地点だけである。
 学術的意義・評価： 森林溪流環境の指標となる種と思われる。
 生存に対する脅威： 農地及びリゾート開発等による森林環境の攪乱と破壊。
 参考文献： 千木良芳範, 2017. 第8章 第3節 名護市のクモ類. “名護市史本編・1 人と自然 I 名護やんばるの自然誌”, 名護市教育委員会, 名護. (印刷中)
 Tanikawa, A., 1999. Japanese Spiders of the Genus *Hersilia* (Araneae: Hersiliidae). Acta. Arachnol., 48(2): 131-137.

執筆者名： 千木良芳範

和名： ヤエヤマナガイボグモ
 分類： クモ目 ナガイボグモ科
 学名： *Hersilia yaeyamaensis* Tanikawa, 1999
 カテゴリ： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ： 該当なし

形態： 歩脚と糸疣が長い。色彩斑紋は樹皮によく似ている。
 近似種との区別： オキナワナガイボグモとはオス触肢、メス貯精囊の形態で見分けることができる。
 分布の概要： 西表島と与那国島からは生息記録があるが、現時点では石垣島からの記録がない。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 近縁のオキナワナガイボグモは奄美大島と沖縄島に生息しており、本種は与那国島と西表島に生息している。石垣島からは現在まで生息記録がないが、本来は生息範囲内であると思われる。

- 生態的特徴： 中程度以上の太さの樹木の樹幹表面で待機型の捕虫をしている。卵のうも樹幹表面に付着させる。
 生息地の条件： 比較的自然度の高い森林内に生息している。
 個体数の動向： 現時点での生息地では安定しているものと思われる。
 現在の生息状況： 林内に生息している。
 学術的意義・評価： 日本に生息する本属のクモ類は、オキナワナガイボグモと本種との2種のみである。
 生存に対する脅威： 森林伐採。

執筆者名： 谷川明男

和名 : オオハシリグモ
分類 : クモ目 キシダグモ科
学名 : *Dolomedes orion* Tanikawa, 2003
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長雌 28.0~38.7 mm、雄 22.3~28.7 mm。全体に茶褐色で、腹部中央に赤褐色の模様がある。オスの頭胸部前縁は白色毛で縁取られている。また、雌雄共に第1脚および2脚のしよ節背面に白色毛が密生している。
近似種との区別 : イシガキアオグロハシリグモと類似するが、成体では体の斑紋と大きさで区別は容易であるが、幼体や亜成体はイシガキアオグロハシリグモやキシダグモ科の他種と混同する恐れもある。
分布の概要 : 県内では沖縄島中北部地域（沖縄市以北）と渡嘉敷島、久米島に分布する。県外では、トカラ列島中之島、奄美大島、徳之島からも記録がある。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : イシガキアオグロハシリグモは石垣島、西表島、及び与那国島に分布し、本種との分布域は重なっていない。
生態的特徴 : 溪流沿いで周年みられる。7月から9月にかけて卵のうを抱えたメスが多くなる。その後の9月から10月頃には、出のうしたばかりの幼体から、体長2 cm くらいの亜成体、成熟した成体が同時にみられることから、複数年生きることが予想される。国頭村ではヤモリやカエル類といった脊椎動物を含めて、20数種の動物を補食することなどが知られるが、詳細な生態は不明である。
生息地の条件 : 自然度の高い森林と好適条件の溪流環境が必要と思われる。
個体数の動向 : 詳細な調査はなく、不明である。
現在の生息状況 : 国頭村や大宜味村に比べると、沖縄市や恩納村における個体数は少ないかもしれない。詳細な調査が必要である。
学術的意義・評価 : 森林溪流環境の指標となる種と思われる。
生存に対する脅威 : 農地及びリゾート開発等による森林環境の攪乱と破壊。
参考文献 : Tanikawa, A., 2003. Two New Species and Two Newly Recorded Species of the Spider Family Pisauridae (Arachnida: Araneae) from Japan. Acta. Arachnl., 52(1): 35-42.

執筆者名 : 千木良芳範

和名 : イシガキアオグロハシリグモ
分類 : クモ目 キシダグモ科
学名 : *Dolomedes yawatai* Ono, 2002
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長雌 27~32 mm、雄 11~13 mm。全体に茶褐色で、腹部中央に赤褐色の模様がある。第1脚および2脚のしよ節背面に白色毛が密生するが、これを欠く個体もある。
近似種との区別 : オオハシリグモと類似する。成体では体の斑紋と大きさで区別は容易であるが、幼体や亜成体はオオハシリグモやキシダグモ科の他種と混同する恐れもある。
分布の概要 : 石垣島、西表島及び与那国島で見つかる。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : オオハシリグモは沖縄島、渡嘉敷島、久米島に分布するほか、県外では、トカラ列島中之島、奄美大島、徳之島からも記録があり、本種との分布域は重なっていない。
生態的特徴 : 石垣島や西表島では、溪流沿いで周年みられる。岩や石の上などで水面に第1脚と第2脚を広げて獲物を待っている。脅かすと水中に逃げ込むこともある。生態に関する調査は断片的で、詳細な生態は不明である。
生息地の条件 : 自然度の高い森林と好適条件の溪流環境が必要と思われる。
個体数の動向 : 詳細な調査はなく、不明である。
現在の生息状況 : 石垣島、西表島及び与那国島のみで見つかっている。
学術的意義・評価 : 森林溪流環境の指標となる種と思われる。
生存に対する脅威 : 農地及びリゾート開発等による森林環境の攪乱と破壊。
参考文献 : Ono, H., 2002. New and remarkable spiders of the families Liphistiidae, Argyronetidae, Pisauridae, Theridiidae, and Araneidae (Araneae) from Japan. Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo (A), 28, 51-60.

執筆者名 : 千木良芳範

和名 : ササキハシリグモ
分類 : クモ目 キシダグモ科
学名 : *Dolomedes zatsun* Tanikawa, 2003
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長雌 18~20 mm、雄 14~15 mm。全体に茶褐色で、腹部の前半側面に黒帯がある。
近似種との区別 : 沖縄県に類似する近似種はいない。
分布の概要 : 沖縄島北部地域の溪流沿いで見つかる。
生態的特徴 : 夜間の溪流沿いで、丈の低い植物の葉上などで見つかる。7月から8月にかけて卵のうを抱えたメ

スが多くなるが、詳細な生態は不明である。
 生息地の条件 : 自然度の高い森林と好適条件の溪流環境が必要と思われる。
 個体数の動向 : 詳細な調査はなく、不明である。
 現在の生息状況 : 国頭村と大宜味村のみで見つかっている。
 学術的意義・評価 : 森林溪流環境の指標となる種と思われる。
 生存に対する脅威 : 農地及びリゾート開発等による森林環境の攪乱と破壊。
 参考文献 : Tanikawa, A., 2003. Two New Species and Two Newly Recorded Species of the Spider Family Pisauridae (Arachnida: Araneae) from Japan. Acta. Arachnl., 52(1): 35-42.

執筆者名 : 千木良芳範

和名 : カノウハエトリ
 分類 : クモ目 ハエトリグモ科
 学名 : *Onomastus kanoi* Ono, 1995
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長雌 4.5~5.0 mm、雄 4.0~5.0 mm。全体に淡緑色で無斑、透明感のある美しいクモ。
 近似種との区別 : 県内及び国内に近似種はいない。他のハエトリグモと比較しても、小型であることと緑色の体色で区別できる。

分布の概要 : 沖縄島 (国頭村、大宜味村、名護市、恩納村) に分布。
 生態的特徴 : 溪流沿いの少し湿った環境でよく見られる。草丈 (樹高) が 1~2 m の植物、特に葉の大きな植物、クワズイモ、ヒリュウシダなどの葉上、葉裏で留まっていることが多い。夜間には、こうした植物の葉裏からぶら下がっている。溪流周辺では周年目撃することができるが、成熟個体は 3 月から 9 月にかけて、亜成体が 10 月から 12 月に目撃される。食性や繁殖、行動など詳細な生態については不明。

生息地の条件 : 自然度の高い森林と好適条件の溪流環境が必要と思われる。
 個体数の動向 : 詳細な調査はなく、不明である。
 現在の生息状況 : 恩納村以北の溪流とその周辺域で見つかる。
 学術的意義・評価 : 森林溪流環境の指標となる種と思われる。
 生存に対する脅威 : 農地及びリゾート開発等による溪流環境の攪乱と破壊。
 参考文献 : Ono, H., 1995. Four East Asian spiders of the families Eresidae, Araneidae, Thomisidae, and Salticidae (Arachnida, Araneae). Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo (A), 21, 157-169.

執筆者名 : 千木良芳範